

<訂正>

本誌 36 号 (2003) の訂正: 21 ページの差し替え 長野県植物研究会誌 36:21-24 2003

ナベクラザゼンソウの葉形と根茎の位置

大塚 孝一 (長野県自然保護研究所)

Koichi Otsuka: Leaf shape and rhizome position of *Symplocarpus nabekuraensis*
Otsuka et K. Inoue

はじめに

長野県北部の飯山市鍋倉山に変わったザゼンソウがあることがわかったのは、1987年6月のことで、渡辺隆一信州大学教授及び地元の関係者らが、鍋倉山のブナ林保護のための調査をしている過程で見いだされたものである。当時、変わったザゼンソウがあると新聞にも報じられたが、「長野県植物誌」(1997)でもザゼンソウとして扱われ長らく日の目を見ずにきたが、最近になって新種ナベクラザゼンソウ *Symplocarpus nabekuraensis* Otsuka et K. Inoue と確認された (Otsuka et al. 2002)。この種は、葉は丸くザゼンソウ *S. foetidus* var. *latissimus* (= *S. renifolius*) に似ているが、全体がより小さく、特に仏炎苞はヒメザゼンソウ *S. nipponicus* に形も大きさもそっくりである。細長い葉を持ち、果実が翌年に熟すヒメザゼンソウとも全く異なっている。葉が展開するのと花が咲くのがほぼ同時であり(花期は初夏)、仏炎苞の全体が地上にでていることも特徴的である。ザゼンソウは葉の展開に先立ち春先に花が咲くが、ヒメザゼンソウでは葉の枯れかかる初夏から夏に花が咲き、植物季節の点でも異なっている。鍋倉山を中心とした関田山脈には広く分布していて、主要な大学や博物館の標本庫の標本調査から、全国的には岩手県から福井県にかけての日本海側の多雪地域に分布することがわかってきた (大塚 2002)。この種は長野県では関田山脈に知られるのみで、「長野県版レッドデータブック維管束植物編」で絶滅危惧Ⅰ類とされている (長野県 2002) が、最近の調査では生育地の現存株数はかなり多いことがわかってきてい

る (大塚 2003)。今回、ナベクラザゼンソウがどのような植物か、ザゼンソウ、ヒメザゼンソウとの比較を含め特に葉形(葉身の形)と根茎の位置に注目して紹介したい。観察は 2001 年に長野県北部において、ザゼンソウは白馬村、ヒメザゼンソウは長野市飯綱高原(自然保護研究所敷地)、ナベクラザゼンソウは飯山市鍋倉山で行った。

葉形

ザゼンソウ属の葉は、葉柄と葉身がはっきりしている一般的な葉のほかに、葉の展開前にそれらを包んでいる鞘葉、花序を抱く特殊化した葉の苞(仏炎苞)がある。ここでは一般的な葉についてその形(葉身の形)をみてみたい。

ザゼンソウ属 3 種の葉形(葉身の形)は、ザゼンソウが心臟形、ナベクラザゼンソウが腎円形、ヒメザゼンソウが卵円形とされている (Otsuka et al. 2002)。

それぞれの種の生育地(ザゼンソウ: 白馬村、ヒメザゼンソウ: 長野市飯綱高原、ナベクラザゼンソウ: 飯山市鍋倉山)で、平均的な大きさの株(ザゼンソウはやや小さな株を含む)30 株について、株中最大葉 1 枚の葉の長さ(全長、葉柄長及び葉身長)と葉幅を計測した。計測日は、ザゼンソウが 7 月 1 日、ヒメザゼンソウが 7 月 3 日、ナベクラザゼンソウが 7 月 4 日である。その結果、葉身長と葉幅の関係を示したのが図 1 である。葉身長はヒメザゼンソウとナベクラザゼンソウでほぼ同じようであるが、ナベクラザゼンソウで幅が広いことがわかる。また、ザゼンソウは他の 2 種の中間的な葉形であるが、より大きいことがわかる。ナベクラザゼンソウは葉幅が葉身よ